

# 離島在住高齢者の外出に影響をおよぼす要因の検討

高畑 陽子<sup>\*</sup>，安武 繁，水馬 朋子

キーワード (Key words) : 1. 高齢者 (elderly people) 2. 外出 (go out)  
3. 離島 (isolated island)

離島であるA町健康増進計画策定に向け実施された質問紙調査結果を基に、高齢者男女を前期高齢者、後期高齢者に分類し、それぞれの時期で、外出に影響をおよぼす要因を探った。分析対象は、前期高齢者127名(男性68名、女性59名)、後期高齢者140名(男性72名、女性68名)であった。分析にはStat View-J5.0統計ソフトを使用し、目的変数を外出の有無、説明変数を健康状態(移動方法、体力への自信、生活状況)、社会交流(外出に誘ってくれる友人の有無、外出に誘ってくれる家族の有無、子どもとの交流の有無)とした多重ロジスティック回帰分析を行った。男性の外出に影響する要因は、前期高齢者では、有意な変数が検出されなかった。後期高齢者では、体力への自信( $p<0.05$ )、外出に誘ってくれる友人の有無( $p<0.01$ )が有意であった。一方、女性の外出に影響する要因は、前期高齢者では、移動方法( $p<0.01$ )が有意であった。後期高齢者では、有意な変数が検出されなかった。

本分析により外出を促進する要因が、男女によって、また、年齢によって異なっていることが明らかにできた。この結果は、今後、介護予防の観点から、特に離島という隔絶された地域で、閉じこもりになりそうな高齢者を発見し支援していく上で、一指標になると考える。

## 緒 言

A町は、市町村合併に伴い住民参画の方式を導入した健康づくり計画を策定し、現在、その計画の実施段階である。本町は、本計画の策定過程で、町民の日常生活の実態把握および若年層の高齢者への関わり方等を調査する目的、また、計画実施後の評価を行う目的で、小学生から高齢者までの全ての年齢層の住民に対して質問紙調査を行った。本質問紙調査の単純集計は、計画実施する上での目標設定の参考資料としたが、現段階では、高齢者の日常生活動作の実態とその関連要因については明らかにされていない。計画作成の際に実施された質問紙調査データを用い、その関連因子の分析を行うことは、介護予防の観点から具体的な施策を講じる上で役立てることができると考えた。高齢者の日常生活の実態を把握することは、2006年4月に行われた介護保険法改正の中でも強調されている予防の観点から住民の健康を保持、増進していく上で重要である。

加齢とともに社会活動性の低下が起こる。すなわち、身体能力の低下から自分自身の健康や生活全般について、また、家族を含め他者との人間関係についても否定的に捉える人が多くなる<sup>1)</sup>。社会活動性の低下は、身体能力の低下にとどまらず人生の満足度や精神的な健康を左右するため、身体面、精神面を含めた健康度が把握で

きる重要な因子であるといえる<sup>2-4)</sup>。身体能力が低下すると、外出や移動が困難となり対人交流が制限され、活動範囲および交流範囲が狭められる<sup>5,6)</sup>こと、また、外出は身体・心理・社会的な側面で健康水準に影響を与える<sup>7)</sup>ことが明らかになっている。これらのことより、身体能力が低下する前に、高齢者の社会行動範囲を拡げ、他世代も含めて交流できるグループを作るなど他者と助け合える関係性を作っておくことが、閉じこもりを予防する上で、必要になってくると考える。よって、高齢者の心身の活動性を高めてQOLの向上を図るには、どのようなサービスを提供すればよいかを考える一指標とするべく、『外出』に焦点を当て、何が外出の有無に影響しているのかを明らかにすることは意義があると考え

本研究では、A町健康増進計画策定に向け実施した質問紙調査結果(高齢者)を用い、高齢者男女を前期高齢者、後期高齢者に分類し、それぞれの時期で、外出に影響をおよぼす要因を明らかにすることを目的として分析を行った。

## 研究方法

### 1. 対象および調査時期

対象：A町の65歳以上の住民の内633名を無作為抽出

・ Analysis of factors which influence whether or not elderly people on an isolated island go out

・ 県立広島大学保健福祉学部看護学科

・ \*連絡先：〒723-0053 三原市学園町1-1

TEL 0848-60-1120 E-mail: takahata@pu-hiroshima.ac.jp

・ 広島大学保健学ジャーナル Vol.7(1): 8~14, 2007

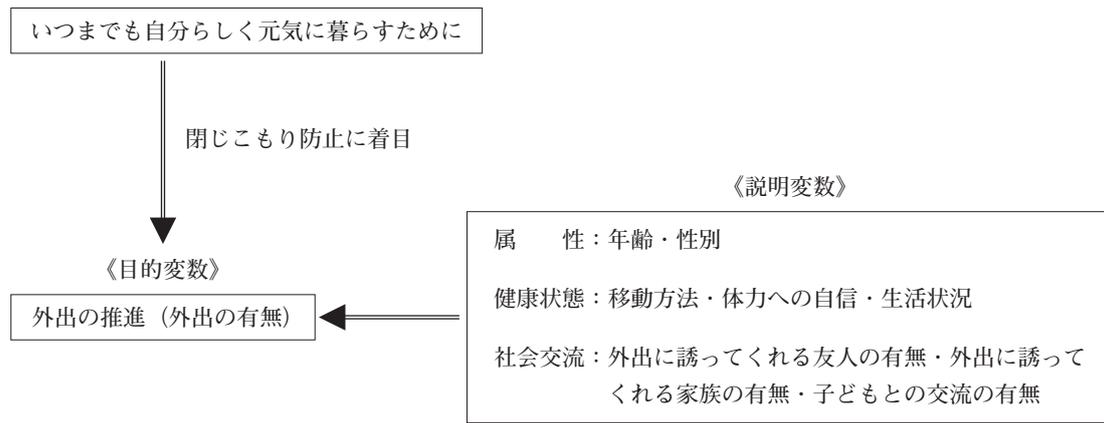


図1. 調査分析の枠組み

により選定し、調査を行った。そのうち本研究対象者は、有効回答のあった267名（前期高齢者・男性68名，後期高齢者・男性72名，前期高齢者・女性59名，後期高齢者・女性68名）とした。

なお，前期高齢者は65歳以上から75歳未満の者，後期高齢者は75歳以上の者とした。

時期：平成16年8月から9月

## 2. 調査方法・配布回収方法

無記名式自記式質問紙調査法であり，調査票は郵送し，回収は健康増進計画高齢期保健ワーキングメンバーによる個別訪問により行った。

## 3. 対象地域の特性

A町は人口1万人程度の離島であり，本土にある小都市とはフェリーおよび高速船で結ばれている。高齢者は，ほとんどの人が通院しているが，島内に病院がないため島外へ行っている状況である。また，畑や果樹園を所有する家庭が多く，高齢者の大半は農作業をしていることも特徴である。

## 4. 調査内容・分析方法

### 1) 調査内容

質問紙調査票により，属性，健康状態，社会交流を把握した。健康状態として，移動方法については，「自力歩行」であるか，「自力では歩行困難であり，杖，補装具，歩行器，車椅子，シルバーカー等の使用が必要」であるかを尋ねた。体力への自信については，「とても体力に自信がある」「まあまあ体力に自信がある」「体力に自信がない」「体力にまったく自信がない」の選択肢より1つ選択してもらった。また，生活状況については，「とても楽しく過ごしている」「まあまあ楽しく過ごしている」「少し悩みがある」「とても悩みがある」の選択肢より1つ選択してもらった。次に，社会交流として，外

出の有無，外出に誘ってくれる友人の有無，外出に誘ってくれる家族の有無，1年以内の子どもたちとの交流の有無について尋ねた。

### 2) 分析方法

外出の有無と他項目との関連を検討するため，Stat View-J5.0を用い，多重ロジスティック回帰分析を行った。

なお，体力への自信についての回答は，「とても体力に自信がある」「まあまあ体力に自信がある」を「体力に自信がある」に併合し，「体力に自信がない」「体力にまったく自信がない」を「体力に自信がない」に併合して分析を行った。また，生活状況についての回答は，「とても楽しく過ごしている」「まあまあ楽しく過ごしている」を「楽しく過ごしている」に併合し，「少し悩みがある」「とても悩みがある」を「悩みがある」に併合して分析を行った。

次に，先に述べた調査分析の枠組みを図1に示す。

## 5. 分析結果公表にあたっての倫理的配慮

本調査は，無記名式自記式質問紙調査法であり，回答にあたっては，A町健康増進計画を推進するために調査結果を活用する旨を明記した。以上より，回答が得られたことで，質問紙調査の趣旨を理解し，同意されたものと解釈した。加えて，分析にあたっては，統計的に処理し，個人が特定されることのないように配慮した。

# 結 果

## 1. 対象の特性

本調査の対象は，後期高齢者の女性を除いて，男女ともに移動方法が自力歩行である者は，8割以上であった。男女それぞれの年齢による違いは，男性では，前期高齢者で94%の人が自力歩行可能であるが，後期高齢者になるとその割合が85%に減少する。女性では，前期高

齢者で92%の人が自力歩行可能であるが、後期高齢者になるとその割合が63%まで減少する。

男女別にみた体力への自信について、男女それぞれの年齢による違いを見ていく。男性では、前期高齢者で40%の人が体力への自信を持っており、後期高齢者になると44%になる。女性では、前期高齢者で69%の人が体力への自信を持っているが、後期高齢者になると43%に減少する。男性では、前・後期高齢者で割合の違いは見られなかったが、女性では、後期高齢者の方が体力への自信のない人の割合が高かった。また、男女を比べると前期高齢者では、女性の方が体力への自信を持っている割合が高いが、後期高齢者ではほぼ同率になる。次に、生活状況について見ていく。男性は女性と比

べると、毎日を楽しく過ごしている人の割合が低かった。男性では、前期高齢者と比べ、後期高齢者の方が楽しく過ごせる人の割合が高い一方で、女性の結果は、それと相反していた。

通院状況は、男女ともに6割以上の人が通院していた。実際に外出している人は、前期高齢者の男女ともに7割以上であった。この割合は、後期高齢者になると男女ともに低くなるが、6割以上の者は外出をしていた。外出に誘ってくれる人は、男性は友人より家族の方が多く、女性は友人と家族の比率に差はなかった。加えて、男性は、外出に誘ってくれる友人がいる人といない人の割合が等しいのに比べて、女性の方が、外出に誘ってくれる友人がいる人の割合がいない人より高かった。また、子

表1. 対象の特性

	人数 (%)			
	男 性		女 性	
	前期高齢者	後期高齢者	前期高齢者	後期高齢者
対象人数	68 (100%)	72 (100%)	59 (100%)	68 (100%)
移動方法				
自力歩行	64 (94%)	61 (85%)	54 (92%)	43 (63%)
自力以外*1	4 (6%)	11 (15%)	5 (8%)	25 (37%)
体力への自信				
自信あり	27 (40%)	32 (44%)	41 (69%)	29 (43%)
とても体力に自信がある*2	4	1	5	1
まあまあ体力に自信がある*2	23	31	36	28
自信なし	41 (60%)	40 (56%)	18 (31%)	39 (57%)
体力に自信がない*3	37	38	16	32
体力にまったく自信がない*3	4	2	2	7
生活状況				
楽しい	15 (22%)	24 (33%)	45 (76%)	42 (62%)
とても楽しく過ごしている*4	2	3	9	6
まあまあ楽しく過ごしている*4	13	21	36	36
悩みあり	53 (78%)	48 (67%)	14 (24%)	26 (38%)
少し悩みがある*5	45	42	13	18
とても悩みがある*5	8	6	1	8
通院状況				
通院している	49 (72%)	58 (81%)	39 (66%)	58 (85%)
通院していない	19 (28%)	14 (19%)	20 (34%)	10 (15%)
外出に誘ってくれる友人の有無				
いる	34 (50%)	36 (50%)	47 (80%)	44 (65%)
いない	34 (50%)	36 (50%)	12 (20%)	24 (35%)
外出に誘ってくれる家族の有無				
いる	45 (66%)	43 (60%)	46 (78%)	47 (69%)
いない	23 (34%)	29 (40%)	13 (22%)	21 (31%)
外出の有無				
外出する	54 (79%)	46 (64%)	50 (85%)	45 (66%)
外出しない	14 (21%)	26 (36%)	9 (15%)	23 (34%)
子どもとの交流の有無				
交流がある	7 (10%)	8 (11%)	4 (7%)	12 (18%)
交流がない	61 (90%)	64 (89%)	55 (93%)	56 (82%)

\*1 自力以外とは、移動時に『杖、補装具、歩行器、車椅子、シルバーカー』等を使用していることを示す。

\*2 質問紙票で、体力への自信について尋ねた項目の回答:「とても体力に自信がある」「まあまあ体力に自信がある」を併合し、「自信あり」とした。

\*3 質問紙票で、体力への自信について尋ねた項目の回答:「体力に自信がない」「体力にまったく自信がない」を併合し、「自信なし」とした。

\*4 質問紙票で、生活状況について尋ねた項目の回答:「とても楽しく過ごしている」「まあまあ楽しく過ごしている」を併合し、「楽しい」とした。

\*5 質問紙票で、生活状況について尋ねた項目の回答:「少し悩みがある」「とても悩みがある」を併合し、「悩みあり」とした。

どもとの交流に関しては、男女ともにほとんどの者が交流していなかった (表1).

**2. 外出に影響を与える因子**

外出に影響する因子の男女による違いを明らかにするために、表1で示した9項目のうち、対象人数および通院状況を除く7項目 (外出の有無, 移動方法, 体力への自信, 生活状況, 外出に誘う友人の有無, 外出に誘う家族の有無, 子どもとの交流の有無) について検討した. 外出に影響を及ぼす要因を多重ロジスティック回帰分析により、男女毎, 年齢別に検討した.

まず、男性に関して、前期高齢者男性の外出の有無に有意に作用する因子は検出できなかった (表2). 後期高齢者男性の外出の有無には、体力への自信, 外出に誘ってくれる友人の有無が有意に作用する因子として採用された (表3). 次に、女性に関しては、前期高齢者女性の外出の有無には、移動方法が有意に作用する因子として採用された (表4). 後期高齢者女性の外出の有無に有意に作用する因子は検出できなかった (表5).

以上のことより、後期高齢者男性の外出に強い影響を与えている因子は、体力への自信, 外出に誘ってくれる友人の有無であった. 前期高齢者女性の外出に強い影響

**表2. 前期高齢者 男性の外出に影響する要因 (多重ロジスティック回帰分析)**

要 因	標準誤差	p 値	Exp (係数)	95% 下限	95% 上限
移動方法	1.43	n.s.	16.2	0.98	267.52
体力への自信	0.83	n.s.	0.4	0.07	1.79
生活状況	0.85	n.s.	0.9	0.18	4.97
外出に誘ってくれる友人の有無	0.86	n.s.	5.3	0.99	28.71
外出に誘ってくれる家族の有無	0.80	n.s.	2.7	0.56	12.65
子どもとの交流の有無	1.26	n.s.	1.4	0.12	16.26

決定係数:  $R^2=0.23$

n.s.: nonsignificant

**表3. 後期高齢者 男性の外出に影響する要因 (多重ロジスティック回帰分析)**

要 因	標準誤差	p 値	Exp (係数)	95% 下限	95% 上限
移動方法	0.94	n.s.	5.8	0.92	36.36
体力への自信	0.80	<.05	0.2	0.03	0.73
生活状況	0.84	n.s.	0.7	0.14	3.77
外出に誘ってくれる友人の有無	0.75	<.01	7.1	1.62	30.89
外出に誘ってくれる家族の有無	0.73	n.s.	0.5	0.12	1.89
子どもとの交流の有無	1.06	n.s.	0.3	0.04	2.45

決定係数:  $R^2=0.31$

n.s.: nonsignificant

**表4. 前期高齢者 女性の外出に影響する要因 (多重ロジスティック回帰分析)**

要 因	標準誤差	p 値	Exp (係数)	95% 下限	95% 上限
移動方法	1.37	<.01	45.7	3.14	663.48
体力への自信	1.16	n.s.	1.8	0.18	17.14
生活状況	1.28	n.s.	0.9	0.08	11.60
外出に誘ってくれる友人の有無	1.18	n.s.	4.9	0.49	50.26
外出に誘ってくれる家族の有無	1.15	n.s.	1.4	0.15	13.64
子どもとの交流の有無	1.40	n.s.	0.2	0.01	2.35

決定係数:  $R^2=0.33$

n.s.: nonsignificant

**表5. 後期高齢者 女性の外出に影響する要因 (多重ロジスティック回帰分析)**

要 因	標準誤差	p 値	Exp (係数)	95% 下限	95% 上限
移動方法	0.65	n.s.	1.4	0.39	4.94
体力への自信	0.77	n.s.	2.4	0.54	10.83
生活状況	0.68	n.s.	1.1	0.28	4.07
外出に誘ってくれる友人の有無	0.60	n.s.	2.2	0.67	6.95
外出に誘ってくれる家族の有無	0.64	n.s.	2.0	0.56	6.86
子どもとの交流の有無	1.17	n.s.	9.8	0.99	96.13

決定係数:  $R^2=0.15$

n.s.: nonsignificant

を与えている因子は、移動方法であった。また、前期高齢者男性および後期高齢者女性の外出に有意に作用する因子は、今回の分析では検出できなかった。

## 考 察

### 1. 男性高齢者の外出の有無に影響する因子について検討

後期高齢者男性の外出の有無に影響していた因子は、体力への自信、外出に誘ってくれる友人の有無であった。なお、前期高齢者男性の外出の有無に影響していた因子は、本分析では検出できなかった。

男性の移動方法は女性と比べて自力歩行の割合が高く、実際の通院に関しては、女性とほぼ変わらなかった。これらより、男性の体力状況は女性より高いもしくは、同等であると捉えるが、体力への自信や、生活を送る上で楽しく過ごしているかとの問いに対しては、女性と比して、男性で、自信のない者や楽しく過ごしていない者の割合が多かった。長田ら<sup>8)</sup>は、健康状態に及ぼす心理的要因の男女差について明らかにしており、男性では、身体的検査項目の結果が、主観的幸福感、さらには、うつ傾向に影響する<sup>9)</sup>一要因であると指摘している。この要因は、女性の主観的幸福感には影響を及ぼしていなかった。今回の調査結果から、男性は女性と比べ自分自身の体力状態についてより厳しく捉えており、外出の有無に影響を与えていた。これにより、男性は、個人差はあるにせよ高齢になるにつれて体力が衰えてくることに対して、より敏感にまた悲観的に捉えていると解釈した。これは、体力への自信の無さや楽しく生活を送っていないという者の割合が、男性に高かったという本結果からも推測できる。加えて、今回は身体的検査項目という客観的情報はないが、先行文献で指摘されているように、体力の衰えが、主観的幸福感という心理面に影響を及ぼしているのではないかと予測できた。身体状態は、個人差はあるとしても年を重ねる毎に低下していくので、男性の外出を促す際には、客観的な身体的検査項目の指標を用い身体能力を把握し、その能力が急激に低下しないように、体力の維持、向上へ向け支援するとともに、他の心理的に満足できる要因を探る必要があると考える。生きがいや主観的健康感に影響を与える要因として、地域で行われる社会・奉仕活動や学習活動などへの参加が指摘されている<sup>3,4)</sup>ことから、そういった視点で施策を講じることも有効であると考えられる。このような対策は、退職後、家で過ごす機会が増す時期から取り組むことで、75歳以上の後期高齢者になった男性の閉じこもりを予防することにつながると考える。

次に、外出に誘ってくれる友人の有無については、男性の他者との関係作りを見ると、職場で知り合い、趣味を通じて継続、発展するパターンがもっとも多いと報告

されている<sup>10)</sup>。本調査の対象となった地域は離島であり、就業のためにフェリーや高速船で本島に通っている人が多く、退職後に職場で知り合った人達と交流を持つためには、フェリーや高速船での移動を余儀なくされ、それも交流を困難にさせる一要因になっていると考える。調査対象となった年代の女性の多くは専業主婦であり、畑仕事や買い物など、日常生活の中で近隣の住民と顔を合わせる機会が多く、長い年月をかけ、外出する際に自然と誘い合える関係ができていたが、男性では、退職するまでに女性のような近隣住民との関係性ができていないので、外出する際に自然と誘い合える関係にないと考えられる。しかし、男性の中でも後期高齢者の外出の有無には、外出に誘ってくれる友人の有無が大きな影響を与えているため、対策として、地域で行われる社会・奉仕活動や学習活動などへの参加を促すことが考えられる。人間関係の構築には時間を要するため、退職後すぐに対策を講じることが望ましく、このような機会には、少しでも多くの高齢者の参加を得られるよう工夫することが必要となってくる。現在、本町では、子どもと高齢者との交流の場を積極的に設けることや、子どもの登下校の時間に合わせた見守り運動を実施している。このような活動は、子どもと高齢者の交流の場が広がるのみではなく、その場で知り合った高齢者同士の交流の場を広げることにもつながるであろう。さらに、高齢者が子どもの登下校の安全を見守るということで、高齢者が他者の役に立っているという生きがいにもつながっていくのではないだろうか。この生きがいは、前段で述べた高齢者の心理的に満足できる要因とも関係し、意味があると考えられる。

### 2. 女性高齢者の外出の有無に影響する因子について検討

前期高齢者女性の外出の有無に影響していた因子は、移動方法であった。なお、後期高齢者女性の外出の有無に影響していた因子は、本分析では検出できなかった。

表1で示したように、前期高齢者と比較すると、後期高齢者になると自力歩行している者の割合が低くなる。これは、年齢とともに、自立度が確実に低下していることを示している。自立度の低下は、身の回りの行動に対して自信が持てないことを意味する自己効力感の低下につながると指摘されている<sup>11)</sup>。身の回りの行動に対して自信が持てなくなると、他者の世話になってまで外出をしなくても良いと考え、結果的に、家の中に閉じこもってしまうのではないだろうか。実際、表1に示すように、外出している者の割合は、移動する際の方法に呼応している。外出は、身体・心理・社会的な側面で健康水準に影響を与えることから<sup>7)</sup>、移動方法が自立していなくても、他者の世話になって申し訳ないという気持ちや自己効力感を損なうことなく、外出することができる

よう働きかけることが、今後、必要となってくる。現在、本町では、健康増進計画の中で、車椅子で利用できる施設やトイレ、通行しやすい道路の啓発に努めている。加えて、車椅子の貸し出し制度や利用方法の周知に努めている。このような活動は、障害を持った人でも外出することを前向きに捉えるなど、町民全体の高齢者や障害を持つ人々に対しての意識変容につなげる第一歩であると考ええる。

また、外出機会の減少は閉じこもりに、さらには、廃用症候群の発生、寝たきりへ移行する<sup>12)</sup>。実際に閉じこもりになる前段階で、高齢者にどのような変化が起きているのか研究した栗原らは、健康状態のうち、外出も含めた社会活動に有意な影響を及ぼす要因は、現病歴の変化および健康度の変化が挙げられ、また、健康状態以外の要因では、独居期間、独居の自己決定および仕事が増えらると指摘している<sup>13)</sup>。本調査は、『外出』に焦点を当てた横断的調査であり、上記の先行文献での指摘に関して、検討することはできなかったが、今後、このような視点で長期的に調査し、結果を積み重ねていくことは、前期高齢者や後期高齢者といった広い範囲ではなく、より限定した閉じこもり予備軍を発見し、働きかけることができ、意義深いと考える。

## 結 語

本研究では、A町が健康増進計画策定のための基礎資料を得るために実施した質問紙調査結果を基に、高齢者男女を前期高齢者、後期高齢者に分類し、それぞれの時期で、外出に影響をおよぼす要因を明らかにすることを目的とし、分析を行った。本分析により、外出に影響をおよぼす要因は、後期高齢者男性では「体力への自信」および「外出に誘ってくれる友人の有無」が、また前期高齢者女性では「移動方法」というように、男女によって、また、年齢によって異なっていることが明らかになった。この結果は、今後、介護予防の観点で、閉じこもり予備軍を発見し、その人の個体要因や環境要因に応じた支援方法を考えていく上で、一指標になると考える。

## 謝 辞

本分析を行うにあたり、質問紙調査にご協力いただきました町民の皆様、健康増進計画策定ワーキングおよび委員の方々、町職員の方々に深謝いたします。

なお、健康増進計画は、健康増進計画策定委員会により策定されました。

## 文 献

1. 玉腰暁子, 青木利恵, 大野良之 他: 高齢者における社会活動の実態. 日本公衆衛生雑誌, 42: 888-896, 1995
2. 山下一也, 小林祥泰, 山口修平 他: 社会的活動性の異なる健康老人の主観的幸福感と抑うつ症状. 日本老年医学会雑誌, 30: 693-697, 1993
3. 藤原佳典, 杉原陽子, 新開省二: ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響 地域保健福祉における高齢者のボランティアの意義. 日本公衆衛生雑誌, 52: 293-307, 2005
4. 早坂信哉, 多治見守泰, 大木いずみ 他: 在宅要援護高齢者の主観的健康感に影響を及ぼす因子. 厚生学の指標, 49: 22-27, 2002
5. 野口裕二: 高齢者のソーシャルネットワークとソーシャルサポート—友人・近隣・親戚関係の世帯類型別分析—. 老年社会科学, 13: 89-105, 1991
6. 河野保子: 高齢者の生活状況からみた寝たきり状態となる背景要因に関する研究. 愛媛医学, 15: 52-62, 1996
7. 藤田幸司, 藤原佳典, 熊谷 修 他: 地域在宅高齢者の外出頻度別にみた身体・心理・社会的特徴. 日本公衆衛生雑誌, 51: 168-180, 2004
8. 長田 篤, 山縣然太郎, 中村和彦 他: 地域後期高齢者の主観的幸福感とその関連要因の性差. 日本老年医学会雑誌, 36: 868-873, 1999
9. 福田寿生, 木田和幸, 木村有子 他: 地方都市における65歳以上住民の主観的幸福感と抑うつ状態について. 日本公衆衛生雑誌, 49: 97-105, 2002
10. 矢部拓也, 西村昌記, 浅川達人 他: 都市男性高齢者における社会関係の形成. 老年社会科学, 24: 319-326, 2002
11. 蘭牟田洋美, 安村誠司, 阿彦忠之 他: 自立および準寝たきり高齢者の自立度の変化に影響する予測因子の解明 身体・心理・社会的要因から. 日本公衆衛生雑誌, 49: 483-495, 2002
12. 竹内孝仁: 寝たきり老人の看護と看護研究の枠組み. 看護研究, 25: 2-8, 1992
13. 栗原(若狭) 律子, 桂 敏樹: ひとり暮らし高齢者の「閉じこもり」予防および社会活動への参加に関連する要因. 日農医誌, 52: 65-79, 2003

# Analysis of factors which influence whether or not elderly people on an isolated island go out

Yoko Takahata, Shigeru Yasutake and Tomoko Mizuma

Faculty of Health and Welfare, Department of Nursing, Prefectural University of Hiroshima

Key words : 1. elderly people    2. go out    3. isolated island

**Objective:** To investigate the factors which encourage the elderly to go out of their houses.

**Subjects and Methods:** The subjects were 140 elderly males and 127 elderly females who completed self-reporting questionnaires. The following were selected as factors influencing going out in elderly people: sex; age; three factors related to health and well-being (whether they could walk by themselves, physical vigor, life satisfaction), and three factors related to social life (whether they had friends to go out with, family members to go out with, and the opportunity to interact with children).

**Results:** For elderly males, physical vigor and having friends to go out with were the strongest factors related to going out. For elderly females, being able to walk by themselves was the only factor which emerged strongly in relation to going out.

**Conclusions:** The factors influencing whether elderly people went out or not were different between the sexes. From this result, it may be concluded that different approaches will be needed for elderly males and elderly females.